

# 社会化の最終目標への道

高 澤 勇

## 目 次

### 要約

- 1 序論
- 2 社会化における苦痛とは何か
  2. 1 仏教における苦痛について
  2. 2 心理学における欲求と苦痛
- 3 苦痛の根本原因は何か
  3. 1 十二縁起説による苦痛の根本原因の探求
  3. 2 無明とは何か
- 4 真実相とは何か
  4. 1 宇宙の真実相の解明
  4. 2 社会化の最終目標としての平安への道
- 5 結論

## 要 約

本稿の目的は、社会化の最終目標への道を解明することである。この目的に向かって、まず第1に、社会化における苦痛とは何かという課題について、仏教における苦痛の研究や心理学における欲求説に関係する苦痛などを研究し

た。次いで第2に、苦痛の根本原因は何かという課題について、十二縁起説による苦痛の根本原因を研究した。そして第3に、真実相とは何かという課題について、大乘仏教の根本観念である空を中心に研究した。

その結果は、次のように要約することができる。わたくしたちの社会化の最終目標は平安であるといえよう。その平安に到達するためには、人生の日常生活における無数の苦痛から開放されなければならないであろう。これらの苦痛から開放されるためには、その苦痛の現状とそれが発生してくる根源を論理的に知らなければならないであろう。それらの苦痛の根源は仏教では無明にあるといわれている。その無明とは真実相に対する無明であるといわれている。その真実相とは空であるといわれている。そして、ひとはこの空を知ることによって苦痛から開放されて、社会化の最終目標である平安に到達することができるといわれているのである。

本論においては、上記の順序にしたがって、社会化の最終目標への道とはどのようなものであるのかについて、具体的に解明したい。

キーワード：社会化, 最終目標, 平安, 苦痛, 欲求説, 無明, 縁起説, 真実相, 空, 素粒子

## 1 序 論

先に、わたくしは、拙論「社会化の原動力—体系の大要—」を公表した。(高澤 1997) そこでは、個人はなぜ社会を生み出すのかという主題の解明に主眼がおかれていた。

次に、わたくしは、拙論「社会化の発展」を公表した。(高澤 1998) そこでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における最初の社会化および社会はいかにして発展するのか、という主題の解明に主眼がおかれていた。

その次に、わたくしは、拙論「社会化の最終目標」を公表した。(高澤 2006) そこでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における社会化の最終目標は何であるのか、という主題の解明に主眼がおかれていた。

この「社会化の最終目標」において到達した結論は次の通りである。

「社会化の最終目標は、真の自己(宗教的自己)を実現して、しかも人間社会で5段階の欲求を充足させて生きてゆくことである。」(高澤 2006: 53)

それでは、社会化の最終目標への道はどのようなものであるのか。本稿の主眼は、この課題の解明におかれる。

## 2 社会化における苦痛とは何か

わたくしたちの社会化の最終目標は何であろうか。(1) おいしい物を食べて健康に生活できることであろうか。(生理的欲求の充足)(2) お金持ちになって安全に生活することであろうか。(安全欲求の充足)(3) 社会の中で一生懸命に働くことであろうか。(社会的欲求の充足)(4) 高い社会的地位を獲得して他者から尊敬される人になることであろうか。(尊敬欲求の充足)(5) 自分の好きなことをすることであろうか。(自我的自己実現欲求の充足)これらのどれもがそうであるように思われる。しかし、どれもが不十分のように思われる。何かが欠如しているように思われる。(1) から (5) までの全部を充足できたとしても、なお、何か足りないものがあるように思われる。それは何であろうか。それは「平安」ではないであろうか。

では、「平安」とは何であろうか。「平安」は「苦痛」(不安)と相対的な概念である。「苦痛」が存在しなければ、「平安」もまた存在しない。「平安」は「苦痛」の存在によって成立し、逆に「苦痛」は「平安」の存在によって成立する。したがって、「平安」であるためには「苦痛」から開放されなければならない。「苦痛」から開放されれば、そのまま「平安」に至る。

したがって、「平安」とは、「苦痛からの開放」であろう。そうすれば、わたくしたちの社会化の最終目標は「苦痛からの開放」であると置き換えることができるであろう。

では、「苦痛」から開放されるためにはどうすればよいのか。いうまでもなく、「苦痛」から開放されるためには「苦痛」を除去しなければならない。では、「苦痛」を除去するためにはどうすればよいのか。「苦痛」を除去するためには、まず、「苦痛」とは何かを知らなければならない。そこで、この第2章においては、「苦痛とは何か」について考える。その第1節においては、仏教における苦痛について考える。第2節においては、心理学における欲求と苦痛について考える。

## 2. 1 仏教における苦痛について

では、「苦痛」とは何か。古人は「人は生まれ、人は苦しみ、人は死ぬ」といった。

若山牧水は「幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく」という短歌を詠み、人生の寂しさ、苦しみを嘆いた。J. J. ルソーは『社会契約論』の「第1章 第1編の主題」の冒頭において「人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている。ある者は他人の主人であると信じているが、事実には彼ら以上に奴隷である。」<sup>1)</sup>と、一生涯における諸々の拘束による苦痛について説いている。また、J. ベンサムは『道徳および立法の諸原理序説』の「第1章 効利性の原理について」の冒頭において「自然は人類を苦痛と快樂という、二人の主権者の支配のもとにおいてきた。われわれが何をしなければならないかということを示し、またわれわれが何をしようかということを決めるのは、ただ苦痛と快樂だけである。一方においては善悪の基準が、他方においては原因と結果の連鎖が、この二つの玉座につながれている。苦痛と快樂とは、われわれのするすべてのこ

と、われわれの言うすべてのこと、われわれの考えるすべてのことについて、われわれを支配しているのであって、このような従属をはらいのけようとどんなに努力しても、その努力はこのような従属を証明し、確認するのに役立つだけであろう。ある人は、ことばのうえではこのような帝国を放棄したように見せかけるかもしれないが、実際上は依然としてその帝国に従属し続けている。」<sup>2)</sup> と、人生における自然的・絶対的苦痛について説いている。

人類の誕生以来、今日に至るまで、いつの時代、どの社会においても、人の一生は苦しみに満ちている。

さて、仏教によれば、苦痛とは「生老病死」である。これについて、中村元氏は次のようにいう。

「『衆生は慙れむべし。常に闇冥に処（お）り、身を受くるも、危うく脆し。生あり、老あり、病あり、死あり、衆苦の集まる所なり。ここに死してかしこに生まれ、かしこよりここに生ず。この苦陰に縁りて流転すること無窮なり。』（『長阿含経』第1巻「大本経」）

ここでは生、老、病、死がすべて苦しみと見なされているのである。」（中村 1994 : 445）

この「生老病死」の中でも、「まず苦しみ悩むわれわれ凡夫にとってもっとも切実な問題は、死の現象である。ありとあらゆる人間の苦しみは、死に究極する。」（中村 1994 : 443）「ところで死の現象は、おおむね老衰の現象をともなっている。そこで老衰と死との二つの現象を一つにまとめて表象して、「古い死ぬこと」といいあらわした。」（中村 1994 : 443）

さて、「生老病死」の中の「老・病・死」が人間における苦痛であることは明確である。しかし、「生」は、なぜ苦痛であるのか。仏教においても、それについての説明はあるが、ここでは、人間性の心理学の視点から考える。

## 2. 2 心理学における欲求と苦痛

アメリカの偉大な心理学者であるA. H. マズローは、彼の著書『人間性の心理学』の中で、人間には次に述べる5段階の欲求があると述べている。

### (1) 第1段階 生理的欲求

この生理的欲求について、マズローは、「基本的生理的欲求についてリストをつくることは、無益であると同時に不可能でもあるように思われる。というのは、どの程度詳しく述べるかによって、望むだけのリストができるからである。」(マズロー著、小口訳 1987: 56) と述べている。

また、「生理的欲求は、疑いの余地なく、あらゆる欲求の中で最も優勢なものである。特に極端なまでに生活のあらゆるものを失った人間では、生理的欲求が他のどんな欲求よりも最も主要な動機づけとなるようである。食物、安全、愛情、尊敬などを失った人では、恐らく食物への飢えが他の何ものよりも強いであろう。」(マズロー著、小口訳 1987: 56, 57) とも述べている。<sup>3)</sup>

### (2) 第2段階 安全欲求

この安全欲求について、マズローは、「生理的欲求が比較的よく満足されると、次いで、新しい一組の欲求が出現することになる。大まかに安全の欲求と範疇化できるものである(安全、安定、依存、保護、恐怖・不安・混乱からの自由、構造・秩序・法・制限を求める欲求、保護の強固さなど)。生理的欲求に関して述べられてきたことはすべて、この欲求についても当てはまる。もっとも、この欲求については少し割り引いて考えねばならないが、有機体は、この欲求によって生理的欲求と同じくらい完全に支配される。」(マズロー著、小口訳 1987: 61) と述べている。

また、「安全の欲求が最もはっきりしたかたちで現れるのは、強迫神経症である。強迫現象にとりつかれた人は、世の中を、制御できない、予期できない、

見慣れない危険が全く起こらないように、秩序だて安定させようと気違いじみた試みをするのである。あらゆる類の儀式、規則、方式で自分を固め、あらゆる偶発的出来事に備え、新しい不測の事態がけっして起こらないようにしようとする。こういう人は、ゴールドシュタインが記述した脳損傷のケースによく似ている。すなわち脳損傷の人は、見慣れぬ奇妙なものはすべて避け、自分の限られた世界をすべてあてにできるようにきちんと規律正しく秩序立てることにより、どうにかうまく自分の均衡を保っていくのである。彼らは、予測できないこと（危険）がけっして起こらないように世界を組み換えようとする。そして、彼ら自身に過失がないとしても、何か予期しないことが生じると、まるですべてが終りのようなパニック反応を起こすのである。」（マズロー著、小口訳 1987：66、67）とも述べている。<sup>4)</sup>

### （3）第3段階 社会的欲求

この社会的欲求について、マズローは、「生理的欲求と安全欲求の両方が十分に満たされると、愛と愛情そして所属の欲求が現れてくる。そしてこれまで述べた一連の過程がこの新しい欲求を中心に繰り返されることになる。今や、かつてなかったほど友達や恋人、妻、子どもなどのいないことを痛切に感じてくる。こういう人は、全般に、人々との愛情に満ちた関係に飢えているのであり、すなわち所属する集団や家族においての位置を切望しているのであり、この目標達成のために一所懸命、努力することになる。そして、この世の中の何よりもそのような位置を得たいと願い、かつて飢餓状態であった時には、愛などは非現実的で不必要で取るに足らぬことと軽蔑していたことさえ忘れてしまうであろう。今や、孤独、追放、拒否、寄るべないこと、根無し草であることなどの痛恨をひどく感じることになる。」（マズロー著、小口訳 1987：68）と述べている。<sup>5)</sup>

#### (4) 第4段階 尊敬欲求

この尊敬欲求について、マズローは、「我々の社会では、すべての人々（病的例外は少し見られる）が、安定したしっかりした根拠をもつ自己に対する高い評価、自己尊敬、あるいは自尊心、他者からの承認などに対する欲求・願望をもっている。これらの欲求は、二分することができる。第一に、強さ、達成、適切さ、熟達と能力、世の中を前にしての自信、独立と自由などに対する願望がある。第二に、（他者から受ける尊敬とか承認を意味する）評判とか信望、地位、名声と栄光、優越、承認、注意、重視、威信、評価などに対する願望と呼べるものがある。」（マズロー著、小口訳 1987：70）と述べている。

また、「自尊心の欲求を充足することは、自信、有用性、強さ、能力、適切さなどの感情や、世の中で役に立ち必要とされるなどの感情をもたらす。しかし逆にこれらの欲求が妨害されると、劣等感・神経症的傾向を引き起こすことになる。重症の外傷神経症の研究を見れば、基本的自信がいかに必要であるか、それをもたない人間がいかに無力であるかを容易に理解することができるのである。」（マズロー著、小口訳 1987：70、71）とも述べている。<sup>6)</sup>

#### (5) 第5段階 自己実現欲求

この自己実現欲求について、マズローは、「これらの欲求がすべて満たされたとしても、人は、自分に適していることをしていないかぎり、すぐに（いつもではないにしても）新しい不満が生じ落ちつかなくなってくる。自分自身、最高に平穩であろうとするなら、音楽家は音楽をつくり、美術家は絵を描き、詩人は詩をかいていなければならない。人は、自分になりうるものにならない。人は、自分自身の本性に忠実でなければならない。このような欲求を、自己実現の欲求と呼ぶことができるであろう。」（マズロー著、小口訳 1987：72）「この欲求は通常、生理的欲求、安全欲求、愛の欲求、承認の欲求が先立って満足された場合に、それを基礎にしてはつきりと出現するのである。」（マズロー著、小口訳 1987：72）と述べている。

また、「これらの欲求が実際にとるかたちは、もちろん人により大きく異なる。ある人では、理想的母親になろうとする願望のかたちをとり、また他の人では、運動競技で表現されたり、絵を描くことや発明で表現されたりもする。この段階では、個人差は最も大きい。」(マズロー著、小口訳 1987: 72)とも述べている。<sup>7)</sup>

さて、人間に、この5段階の欲求があるならば、この欲求を充足できたときには喜びが生じるであろう。5段階の欲求の充足の喜びは、次に示す通りである。

- (1) 第1段階 生理的欲求の充足の喜び
- (2) 第2段階 安全欲求の充足の喜び
- (3) 第3段階 社会的欲求の充足の喜び
- (4) 第4段階 尊敬欲求の充足の喜び
- (5) 第5段階 自己実現欲求の充足の喜び

しかし、この欲求が充足できないときには苦痛が生じるであろう。5段階の欲求の不充足の苦痛は、次に示す通りである。

- (1) 第1段階 生理的欲求の不充足の苦痛
- (2) 第2段階 安全欲求の不充足の苦痛
- (3) 第3段階 社会的欲求の不充足の苦痛
- (4) 第4段階 尊敬欲求の不充足の苦痛
- (5) 第5段階 自己実現欲求の不充足の苦痛

では、これらの苦痛はそれぞれどのように異なるのであろうか。既に触れたマズローの学説を参考にしながら考えてみると、5段階の欲求の不充足の苦痛の程度は、次に示す通りである。

(1) 第1段階 生理的欲求の不充足の苦痛の程度

- ① 例えば、空気を呼吸したい欲求は、生きている間、30秒以内には必ず生じてくるといえよう。これが充足されなければ、非常に大きな、死に直接かかわる苦痛を感じることになる。しかし、普通は、この欲求は意識しないほど容易に充足することができる。
- ② また、例えば、食欲は、空気の呼吸欲求に比べれば、欲求が生じてくる時間的間隔は長い。しかし、これも、生きている間、約12時間以内には必ず生じてくるといえよう。これが充足されなければ、呼吸の場合ほど緊急ではないにしても、非常に大きな、死に直接かかわる苦痛を感じることになる。しかし、普通は、この欲求も、比較的容易に充足することができる。

(2) 第2段階 安全欲求の不充足の苦痛

- ① 例えば、子供が親の愛情を求める欲求は、普通に育てられている場合には問題がないが、親が子供を愛していない場合には、愛情をもって育てることができないわけである。このような場合には、子供は親の愛情を求め続けるのであり、それが充足されない場合には、苦痛が持続することになる。
- ② また、例えば、高原の竹藪に竹の子を採りにでかけたとする。歩いていると熊に出会ってしまった。このような場合には、自分が逃げるか、あるいは熊が逃げるかして、もうこれで大丈夫という状況になるまでは、熊に襲われて大怪我をさせられたり、あるいは殺されたりしたら大変である、という恐怖(苦痛)が付きまとうことになる。

(3) 第3段階 社会的欲求の不充足の苦痛

- ① 例えば、何らかの理由によって、孤島に一人で生きていかねばならなくなつたとしよう。既に、第1段階の生理的欲求や第2段階の安全欲求は充

足されているものとする。普通は、都市には人間が多すぎて、また、社会人として職業についていれば、複雑な人間関係に嫌気がさしているであろう。しかし、長期間、人間社会から孤立していると、人は人間社会に復帰したいと思うものである。そして、それが不可能な場合には、それが可能となるまでは、苦痛が続くことになるのである。

- ② また、例えば、何らかの病気にかかり、放置しておけば死に至るといような病気ではないが、すぐに健康状態に戻るというものでもないので、数年間は社会人として他者とともに元気に働くことが不可能であるとしよう。このような場合には、早く健康になって普通の人のように他者とともに社会で働きたいと思うものである。そして、それが可能となるまでは、苦痛が続くことになるのである。

#### (4) 第4段階 尊敬欲求の不充足の苦痛

- ① 例えば、有名大学を卒業して社会人となり、一流企業に就職して課長として働いているとする。しかし、担当する仕事が気に入らないので、うまくいかないことが多い。そうになると、社長から注意されたり、部下である係長や平社員からも馬鹿にされることになる。このような場合には、仕事に対する自分の態度を変えるか、もしくは転職するかしなければ、他者（社長やことに部下）から尊敬されたいのに馬鹿にされるという苦痛は持続することになる。
- ② また、例えば、バレーボールが好きで、あるバレーボール部の一員となっているとしよう。しかし、ハードな練習は嫌いなので、少しだけしか練習しないからいつまでたっても上手にならない。そのために、他のチーム員や部長や監督から苦情をいわれることが多い。彼は、一生懸命に練習をして他の部員と同等以上の技術を身につけなければ、バレーボールにおいて他者から尊敬されたいという欲求は充足されない。したがって、それが可能となるまでは、苦痛が続くことになるのである。

#### (5) 第5段階 自己実現欲求の不充足の苦痛

- ① 例えば、既に、第1段階の生理的欲求から第4段階の尊敬欲求までは充足しているとする。しかし、本当は、彼はハイネやゲーテのような天才的詩人を超える詩人に成りたがっているでしょう。しかしながら、現実には会社社長であるため、社長としての仕事が忙しくて、とても詩を学び作っているだけの時間的余裕がない。彼にとっては、世界一の詩人になりたいという自己実現欲求の不充足による苦痛は永遠に続くと言ってよいであろう。
- ② また、例えば、一流大学の物理学の教授として、既に、他者から十分に尊敬されている有名な人がいるでしょう。しかし、彼の目標はアインシュタインのように、世界で一番といわれるような研究をして、ノーベル賞を獲得することであるでしょう。そうすると、彼は世界一の研究を成し遂げるまでは、自己実現欲求の不充足の苦痛が続くのである。また、世界一の研究を成し遂げたとしても、ノーベル賞を獲得するまでは、自己実現欲求の不充足の苦痛は続くことになるのである。

上記の5段階の苦痛の原因が5段階の欲求にあることは明確である。したがって、上記の5段階の苦痛を除去するためには、その原因となっている5段階の欲求を除去すればよいのである。では、いかにすればその5段階の欲求を除去することができるのか。それを知るためには、5段階の欲求がどのように生じてくるのか、5段階の欲求の原因は何か、ということを知らなければならない。その根本原因を研究することは、先に触れた「生老病死」の中の「老病死」という苦痛の根本原因を研究することと重複するのである。

では、苦痛はいかにして生じてくるのか。苦痛の根本原因は何か。次の第3章では、このことについて考える。

### 3 苦痛の根本原因は何か

さて、苦痛の根本原因は何であろうか。ここでは、仏教の十二縁起説にしたがって苦痛の根本原因について考える。

#### 3. 1 十二縁起説による苦痛の根本原因の探究

仏教の十二縁起説によれば苦痛の根本原因に至る諸原因は次のように説かれている。

- (1) 「老死」(老い死ぬこと) (苦痛) の原因は「生」(生まれること) にある。
- (2) 「生」(生まれること) の原因は「有」(生存) にある。
- (3) 「有」(生存) の原因は「取」(執着) にある。
- (4) 「取」(執着) の原因は「渴愛」(妄執) にある。
- (5) 「渴愛」(妄執) の原因は「受」(感受) にある。
- (6) 「受」(感受) の原因は「触」(接触) にある。
- (7) 「触」(接触) の原因は「六入」(六つの領域) にある。
- (8) 「六入」(六つの領域) の原因は「名色」(名称と形態) にある。
- (9) 「名色」(名称と形態) の原因は「識」(認識作用) にある。
- (10) 「識」(認識作用) の原因は「行」(潜在的形成力) にある。
- (11) 「行」(潜在的形成力) の原因は「無明」(真実相の無知) にある。

したがって、「無明」を除去すれば「苦痛」は除去されるのである。<sup>8)</sup>では、「無明」とは何か。次の第2節では、これについて考える。

#### 3. 2 無明とは何か

仏教によれば、「無明」とは「真実相の無知」である。この「真実相の無知」

が「無明」となり、「無明」が「苦痛」の根本的原因となるのである。仏教の十二縁起説によれば、「無明」が根本的原因となって、「苦痛」が生じる過程は次のように述べられている。

- (1) 「無明」(真実相の無知)を原因として「行」(潜在的形成力)はある。
- (2) 「行」(潜在的形成力)を原因として「識」(認識作用)はある。
- (3) 「識」(認識作用)を原因として「名色」(名称と形態)はある。
- (4) 「名色」(名称と形態)を原因として「六入」(六つの領域)はある。
- (5) 「六入」(六つの領域)を原因として「触」(接触)はある。
- (6) 「触」(接触)を原因として「受」(感受)はある。
- (7) 「受」(感受)を原因として「渴愛」(妄執)はある。
- (8) 「渴愛」(妄執)を原因として「取」(執着)はある。
- (9) 「取」(執着)を原因として「有」(生存)はある。
- (10) 「有」(生存)を原因として「生」(生まれること)はある。
- (11) 「生」(生まれること)を原因として「老死」(老い死ぬこと)(苦痛)はある。

したがって、「真実相」を知ることによって、「無明」が除去され、「苦痛」は除去されるのである。<sup>9)</sup>では、「真実相」とは何か。次の第4章ではこれについて考える。

## 4 真実相とは何か

「真実相」とは何か。換言すれば、「宇宙(万物)の真実相」とは何か。本章ではこの命題について考える。

### 4. 1 宇宙の真実相の解明

「真実相」とは、「宇宙(万物)は空である」<sup>10)</sup>ということである。では、

「宇宙（万物）は空である」とはどういうことであるのか。

高神覚昇氏は、彼の著書『般若心経講義』<sup>11)</sup>の序において、仏教の根本思想である「空」について、次のように述べている。

「いったい仏教の根本思想は何であるかということ、最も簡明に説くことは、なかなかむずかしいことではあるが、これを一言にしていえば、「空」の一字に帰するといっていると思う。だが、その空は、仏教における一種の謎で、いわば公開せる秘密であるといえることができる。

何人にもわかっているようで、しかも誰にもほんとうにわかっていないのが空である。ただし、その空をば、いろいろの角度から、いろいろの立場から、いいあらわしているのが、仏教というおしえである。」（高神 1952：3）

さて、このように高神覚昇氏は「空」を「公開せる秘密」と言っている。臨濟禪師はこの「空」を「無位の真人」と言っている。（臨濟著、入矢訳 1989：20,21）既に触れたように、仏教史においては、この「空」を巡って実に多くの論戦が交わされている。しかし、その「空」に関する諸学説については、別の機会に紹介し、筆者の意見を述べたいと思う。

そこで、ここでは、高神覚昇氏の「空」の解釈を紹介するとどめておきたい。

高神覚昇氏は『般若心経』の「空」について次のように解釈している。

「ところで、その空を『心経』はどう説明しているかというに、「色即是空」と「空即是色」の二つの方向から、これを説いているのである。すなわち、「色は即ち是れ空」とは、空のもつ否定の方面を現わし、「空は即ち是れ色」とは、空のもつ肯定の方面をいいあらわしているのである。したがって、「空」のなかには、否定と肯定、無と有との二つのものが、いわゆる弁証法的に、統一、総合されているのであって、空を理解するについて、まずわれわれのはっきり知っておかねばならぬことである。

次に空をほんとうに認識するについては、もう一つたいせつなことがある。それは「因縁」ということである。『心経』には因縁について一言も説いては

いないが、因縁を十分に理解しないと、どうしても空はわからないのであって、端的に言えば、空と因縁とは、表裏一体の関係にあるのである。申すまでもなく因縁とは、「因縁生起」ということで、世間のこといっさいみなことごとく因縁の和合によって生じ起るということである。もとよりこのことは、説明を要しない自明の理であるにもかかわらず、われわれはこの自明の理にたいして、平素あまりにも無関心でいるのである。すなわち「因」より直接に果が生ずるがごとく考えて、因縁和合の上の結果であることに気づかないのである。しかもこれがあらゆる「迷い」の根源となっているのである。すなわち凡夫の迷いとは、つまり因縁の理を如実にさとらないところにある。別言すれば、因縁の真理を知らざることが「迷い」であり、因縁の道理を明らかにすることが「悟り」であるといっている。」(高神 1952: 3—4)

「因縁生起」の説明はこれで理解できるのであるが、「空」の説明はこれで理解することができるであろうか。その詳細な批判は別の機会に行うことにして、ここでは、筆者の「空」の解釈をもって、その批判の概略にしたいと思う。

「宇宙(万物)は空である」とは、「宇宙(万物)は不生の素粒子で成立している」<sup>12) 13)</sup>ということである。

では、「宇宙(万物)は不生の素粒子で成立している」とはどういうことであるのか。「宇宙(万物)は不生の素粒子で成立している」とは、「宇宙(万物)は不正の素粒子の縁起による複数集合体である」ということである。

では、「宇宙(万物)は不生の素粒子の縁起による複数集合体である」とはどういうことであるのか。「宇宙(万物)は不生の素粒子の縁起による複数集合体である」とは、「宇宙(万物)は、素粒子の単一体という視点からみれば、不生不滅であり、また不縁起のもの(縁起したものでないもの)であり、それゆえ実有(非無)であり、また有自性である」ということであり、「宇宙(万物)は、不生の素粒子の単一体の縁起による複数集合体という視点からみれば、生滅であり、また縁起のもの(縁起したもの)であり、それゆえ非実有(非無)であり、また無自性である」ということである。

## 4. 2 社会化の最終目標としての平安への道

「宇宙（万物）の真実相」が以上のようなものであるにもかかわらず、ひとは「宇宙（万物）の中の人間の能力にとって可知的な物質（知ることのできる物質）は、無から生じたものであり、それは実有・有自性であり、それは不生不滅である。それなのに、いつの間にか消滅（死）して無になる」と考えているのである。この無明こそが人生の社会化における諸苦の根本的原因となっているのである。

したがって、既に述べたように、「宇宙（万物）は不生の素粒子の縁起による複数集合体である」とは、「宇宙（万物）は、素粒子の単一体という視点からみれば、不生不滅であり、また不縁起のもの（縁起したものでないもの）であり、それゆえ実有（非無）であり、また有自性である」ということであり、「宇宙（万物）は、不生の素粒子の単一体の縁起による複数集合体という視点からみれば、生滅であり、また縁起のもの（縁起したもの）であり、それゆえ非実有（非無）であり、また無自性である」ということである。」という「宇宙（万物）の真実相」を知ることによって、ひとは「苦痛」から開放されて社会化の最終目標である「平安」に到達することができるのである。

## 5 結 論

社会化の最終目的は平安である。平安であるためには人生における諸々の苦痛から開放されなければならない。諸苦痛から開放されるためには、その諸苦痛が発生してくる根源を知らなければならない。その諸苦痛の根源は無明にある。無明とは真実相に対する無明である。では、真実相とは何であるのか。真実相すなわち宇宙（万物）の真実相とは空である。宇宙（万物）は空であるとはどういうことであるのか。宇宙（万物）は空であるとは、宇宙（万物）は不生の素粒子の単一体が縁起によって集合し、また離散することを繰り返して

絶えることのない姿であるということである。ひとは、この宇宙（万物）の真実相を知ることによって「苦痛」から開放されて社会化の最終目標である「平安」に到達することができるのである。

## [注]

- 1) ルソー著、井上訳、平岡責任編集 1966：232から引用した。
- 2) ベンサム著、山下訳、関責任編集 1967：81,82から引用した。
- 3) 第1段階の生理的欲求についての詳細は、マズロー著、小口訳 1987：56—61を参照してほしい。
- 4) 第2段階の安全欲求についての詳細は、マズロー著、小口訳 1987：61—67を参照してほしい。
- 5) 第3段階の社会的欲求についての詳細は、マズロー著、小口訳 1987：68—70を参照してほしい。
- 6) 第4段階の尊敬欲求についての詳細は、マズロー著、小口訳 1987：70—71を参照してほしい。
- 7) 第5段階の自己実現欲求についての詳細は、マズロー著、小口訳 1987：71—72を参照してほしい。
- 8) この「十二縁起説」についての詳細は、中村元 1994a：440—528を参照してほしい。また、Olson, Carl, 2005：38—45も参照してほしい。
- 9) この「十二縁起説」についての詳細も、前掲（注）6）と同様に、中村元 1994a：440—528を参照してほしい。また、Olson, Carl, 2005：38—45も参照してほしい。
- 10) 「宇宙（万物）は空である」における「空」については、非常に多くの学説がある。中村元『中村元選集〔決定版〕第22巻 空の論理（大乘仏教）』（春秋社、1994年）には、次のように述べられている。  
「〈空〉は大乘仏教の根本観念であるということは、だれでも知っている。では〈空〉とは何か、ということになると、なかなか答えが簡単に

は出て来ない。

〈空〉を説いた文献に関する研究は、毎年無数に多く刊行されている。しかし「〈空〉とは何か？」という端的な問題にたいしては、かならずしも答えが与えられていない。学者はとかく避けて通っているという傾きがある。

ここでは、空の理論を説いた代表的な哲学者であるナーガールジュナ（竜樹）の主著『中論』を主な手がかりとして、空の論理を解明しようと努めることにする。」（中村 1994b：はしがきi）

したがって、「空」の理論に関心のある人は、この『空の論理』およびその他の文献を参照してほしい。

- 11) 高神覚昇 1952 『般若心経講義』角川書店、を用いた。
- 12) 「宇宙（万物）は素粒子で成立している」における「素粒子」について、2008年9月現在において、インターネットで調べた、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の素粒子に関する記述を参考にして、少し詳しく述べておきたい。

素粒子とは、分割不能の物質をいう。ただし、分割不能の物質というのは、一般に物質は無限に二分割が可能であるという原則に従うならば、存在することができない。この原則と矛盾するからである。分割可能でしかも分割不可能な物質というものは人間の論理能力の限界を超えているものであるから、それを理解することはできないし、それを想定することもできない。また、分割不能の物質というのは、空間と時間を持たない物質であるという原則に従うならば、それを人間の能力で想定することは不可能である。確かに、空間と時間を持たない物質が存在するのであるならば、その物質は分割不能である。しかし、それは人間の論理能力にとっては、「無」であるから、物質では有り得ない。

したがって、分割不能の物質というものは、現在のところ可想体にすぎない。「現代物理学の研究成果によれば、素粒子（分割不能の物質）とは、

クォークとレプトンであると考えられている。しかし、これらに内部構造が存在することが発見されれば、その内部構造を構成するもののほうが素粒子と呼ばれ、クォークとレプトンは素粒子ではないということになる。」  
(出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』)

- 13) 「宇宙（万物）は素粒子で成立している」ということについて、柳澤桂子氏は彼女の著書『生きて死ぬ智慧』（『般若心経』現代語訳）（小学館、2004年）において、次のように述べている。

私たちは 広大な宇宙のなかに  
存在します  
宇宙では  
形という固定したものはありません  
実体がないのです  
宇宙は粒子に満ちています  
粒子は自由に動き回って形を変えて  
おたがいの関係の  
安定したところで静止します  
お聞きなさい  
形あるもの  
いいかえれば物質的存在を  
私たちは現象としてとらえているのですが  
現象というものは  
時々刻々変化するものであって  
変化しない実体というものはありません  
実体がないからこそ 形をつくれるのです  
実体がなくて 変化するからこそ  
物質であることができるのです  
お聞きなさい

あなたも 宇宙のなかで  
粒子でできています  
宇宙のなかの  
ほかの粒子と一つづきです  
ですから宇宙も「空」です  
あなたという実体はないのです  
あなたと宇宙は一つです  
宇宙は一つづきですから  
生じたということもなく  
なくなるということもありません  
きれいだとか 汚いだとかいうこともありません  
増すこともなく 減ることもありません  
「空」にはそのような  
取るに足りないことはないのです

(柳澤 2004 : 6—11)

#### [文献]

Jean-Jacques Rousseau, 1762, *Du Contract social, ou principes du droit politique*. (=1966, 井上幸治訳『社会契約論』, 平岡昇責任編集『世界の名著30 ルソー』中央公論社。所収。)

Bentham, Jeremy, 1789, *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*. (=1967, 山下重一訳『道徳および立法の諸原理序説』, 関嘉彦責任編集『世界の名著38ベンサム, J. S. ミル』中央公論社。所収。)

高神覚昇, 1952, 『般若心経講義』角川書店

中村元, 1994a, 『中村元選集〔決定版〕第16巻原始仏教の思想Ⅱ(原始仏教Ⅵ)』春秋社

- 中村元, 1994b, 『中村元選集〔決定版〕第22巻空の論理（大乘仏教Ⅲ）』  
春秋社
- Maslow, Abraham Harold, 1970, *Motivation and personality*, second  
edition, Harper&Row. (=1987 小口忠彦訳『人間性の心理学』産能大  
学出版部。)
- 臨濟著, 入矢義高訳, 1989, 『臨濟録』岩波書店（岩波文庫）
- 高澤勇, 1997, 「社会化の原動力」『長野経済論集第34号』長野経済短期  
大学学会
- 高澤勇, 1998, 「社会化の発展」『長野経済論集第35号』長野経済短期大  
学学会
- 柳澤桂子, 2004, 『生きて死ぬ智慧』小学館.
- Olson, Carl, 2005, *Original Buddhist sources*, Rutgers University Press.
- 高澤勇, 2006, 「社会化の最終目標」『長野経済短期大学論叢第43号』長野  
経済短期大学学術研究会

## The Way to the Last Aim of our Socialization

TAKASAWA, Isamu

What is the last aim of our socialization? The last aim of our socialization is peace.

We must escape from our pains in our life to be peace. We must know the origin of our pains to escape from our pains. The origin of our pains is ignorance. It is the ignorance of a true form.

Then, what is the true form? The true form of the universe is emptiness. What is the emptiness? The emptiness is that the

universe is an elementary particle. And the emptiness is the form of the gathering of elementary particles and the separation of elementary particles.

We can escape from our pains and reach the peace of the last aim of our socialization by know this true form of the universe.

以上